薬草売りの口上

岩本修巳

Le Dit de l'Herberie は韻文部とそれに続くほぼ同じ行数の散文部からなる珍しい形体を持っている。またリュトブフの作品群のうち散文の現われるのは殆どこれだけと言ってよい。

翻訳：これより薬草売りの口上の始まり
皆の衆，ここに来られた
大供，小供，お若いのや白髪頭
本当にいい所に来られた
4 全くそうに違いありませんや
騙くらかそう，なんて思っちゃいない
アタシがここからおさらばする前に
7 それが得心いけましょうとも。
腰を下して，ガヤガヤしないで，
お嫌でなきゃ，さあお聞きあれ。
10 吾輩は医者であーる。
これまで数多の帝国を歴訪したが，
カイロの大公殿下は吾輩を
13 一夏に留まらず留め置かれ
永の逗留とは相なったが，
お蔭で一財産こしらえましたわいな。
16 海原を渡り，モレア国を通って，
戻って参りましたが，そこではちと長居を致し，

19 次いでサレルノを通り，
ビュリエヌからヴィテルボから
アプリアにカラブリアに　パレルモと
22 偉い効き目の草々を
摘み取っては来ましたわけでな。
それを付ければどんな病いでも
25 病気の方から逃げていっちまう。
石がガラガラ流れて朝な夕なに
音立て騒ぐ河まで出向いて
28 薬用石を探して参りました。
ジャン司祭がそこで戦さをしておって，
国の中までは入る事を得ず
31 アタシは港に居りました。
ここから，死に人を生き返らせる
最(いと)も貴い石を持ち帰った訳でしてな
34 それは何かと申さば先ず鉄珍玉
ダイヤモンドに金光石
ルビー，真珠雲母，風信子石
37 ガーネットに黄玉
ついでに精金石と仁王血石。
これを持っておられたら
40 死神なんか怖くない。
意気鎖沈するなんぞ愚の骨頂
ちゃんと身持ちをしておれば
43 兎に石を持っていかれる怖れ無し
気丈夫にしておれば
犬が吠えようが，老いぼれロバが

46 喚こうが怖がる事なんか有りゃしない
何でもかんでも心配無しって事だ。
どちらも印度藍色の
49 鉄礬柘榴石に撥情滑石と
草々を持ってきたのは
インドの砂漠からと
52 丸々その国が世界四方に向いて
海にプカプカ浮んでおる
リンコリンドの国からなのでしてな。
55 さあこれは信じなされよ。
アタシが一体何者か，お判りにならないか
さあ黙って　腰を下して
58 アタシの薬草を御覧あれ。
サンタ・マリア様にかけて申さば
これは卑しい屑なんぞではなく，
61 それはそれは大した高貴の薬。
アタシの持っている薬草は造作無く
珍棒をばキリッと立て
64 慢孔をばキュッと締める。
四日熱は置いて，熱なら何熱でも
一週間以内で治してしまう。
67 これは間違いないこと。
腫物で高張したのも平低のも
全部が全部
70 直ってしまう。
おケツの血管がビクビク痛んでも
四の五の言わず直して進ぜましょう。

73 そして歯痛も手際よく
ちょいとした塗り薬で
直してあげますわいな。
76 さて薬とは，如何にして作るか
嘘偽りは申しません
さあトクとお聞きあれ
79 御託を並べはいたしません。
マーモットの脂身と
火曜日の朝にべにひわの
82 糞を取り集め
更にオオバコの葉っぱと
淫売の雲古，これは
85 殊に大年増のがよろしい
更に鉄櫛の屑粉に
小鎌の錆粉
88 更に羊の毛
更に，月曜に剝いた
オート麦の殻
91 これを皆して　膏薬を
こしらえるがよろしい。
歯を汁で洗い潔め
94 頬に件の膏薬を塗りなされよ。
ちっと寝られよ，それがよろしいのだ，
然る後起きた時に，糞や滓が残ったら
97 それこそ，アーメン，クタバリ損ない奴。
お嫌でなければ，さあお聞きあれ
お聞きになれるお方なら，

100 今日一日は無駄働きになりませぬ。
また，結石で大声を上げるお方，
アタシが手当てすりゃ
103 造作なくお直ししましょうとも。
肝臓が火照るとかヘルニヤなら
どんなことになろうとも
106 目茶苦茶直して進ぜるが。
またもし御存知寄りの方に
聾が居たらアタシの館へお連れなさい
109 すぐにもピンピンされる筈，
神様がこの両手を直して下さったからには
その聾が今まで聞えなかったより以上に
112 これから聞えることはありっこない。
さあさあアタシを遣わされた女主人様がアタシの仕事にされた事をお聞きなされ。

〔第1段〕 ご立派な皆の衆，アタシは例の貧乏な説教坊主の仲間じゃないし，教会前に出向いて，綻びだらけのボロマントを着た貧乏な薬草売りでもない。奴等は箱や袋を持ち運び，敷物を広げる輩じや。これ程の数も袋を持っておらない者は胡椒やクミンを商っておるが。アタシが奴等の同類じゃないことはしっかり覚えておいてもらいたい。我こそは，サレルノのトロトゥラ様の舎弟なり。してこの方は長い耳を帽子にして被り，その眉毛が銀の鎖の体で肩までだらりと下っているという女子(おなご)様。これもよく覚えておいてもらいたいのだが，これこそ世界四方で一番賢い奥様じゃ。トロトゥラ先生はアタシ等を四方八方の国々や土地に遣わされておりますが，アプリア，カラブリア，トスカーナにカムパニア，アレマニヤにサクソニア，ガスコーニュ，エスパニヤ，ブリにシャンパ

ーニュ，ブルゴーニュ，アルデンヌの森に遣わされて野獣を殺し，香油を抽出し，身に病いを得ている人々に薬を差し上げますのじゃ。先生はこうお命じなすっておられます。すなわちどんな所に参ろうとも，アタシの周りにお集りの方々が良き手本を得られるように，何事かお話しするようにとな。てな訳で，先生の御元から，いよいよお別れの段に聖人にかけて誓いを立てさせられました故，もしお聞きになりたければだが，皆の衆に虫の病いの直し方を，お教え致しましょう。お聞きになりたいかな？

〔第2段〕 一体全体虫どもはどこから来るのかと幾足りかのお方がアタシにお尋ねになります。お教えするが虫どもは，あれやこれやの温もり肉なり，樽木の味のする例の葡萄酒から出て来おってな，人の体内で熱気と体液とで凝集する訳でしてな，哲学者先生方が言われる如く，そもそもありとあらゆる物質はこれらから出来るのじゃな。さてこうして虫どもは体内に来たるや，心の臓まで昇り来て，ポックリと申す病で死に至らしめるのじゃ。十字を切って下さいまし，神様が，男，女を問わず皆の衆をその病からお守り下さいますように！

〔第3段〕 虫の病を治すには，ほら，そこ目の前にある，皆の足で踏みつけている，世界四方で一番の良薬草，すなわちにがよもぎがよろしいのじゃて。サン・ジャンの日の夜にそれを腰帯にして巻きしめ，また被り物を作って頭に載っける女どもは，その頭も腕も足も手も痛風やヒステリーに侵されぬと申しております。それにしてもどうして女どもの頭が割れず，体が裂けないのか不思議なのじゃが，この草にはそれ程の効能が内蔵されておりますのじゃわいな。アタクシ奴が生国，シャンパーニュに置きましては，この草は「マールボール」と呼んでおりますが，「くさぐさの草の母」という程の意味でして。この草の根を三本と緋衣草の

葉を五枚，オオバコの葉は九枚お取りになられよ。これらを銅の乳鉢に入れて鉄の乳棒でつぶします。このジュースを朝の目覚めに，三日間お飲みなされ。虫の病から直ることはお請け合い。

〔第4段〕 頭巾をぬいで，目をしっかり立てて，アタシの草々を御覧じろ。先生がこの国に遣わされた草々じゃ。さて先生は貧乏人も金持ちと同じに御利益に与かるがよいと思し召されてな，品の仕分けをせよとアタシにおっしゃられた。つまり財布の中に五スー持っておらない人も，一ドゥニエは持っておるものですからな。更に言われたのは，どこでも行った先々の土地，お国で通用しておる通貨で受け取るようにとな。すなわちパリでは一ドゥニエ・パリジ，オルレヤンでは一オルレノワ，ル・マンでは一マンソワ，シャルトルでは一シャルタン，エゲレスのロンドンでは一スターリングを，アタシにはパンでも葡萄酒でも，我が駄馬奴には秣草でもオート麦でもとな。而して祭壇に仕える身は祭壇によりて生きるべし，とある。

〔第5段〕 申して置きますが，男でも女でも，払うにも何にもない程貧乏な人がひょっとして居られたら，前へ出なさるとよいのだが，今日から数えて一年以内に聖霊のミサを上げるという約束で，アタシの片手を神様代りに，もう一つの手は聖母様の代りにお貸しして差し上げる所なのじゃがな。はっきり言わせてもらいますが，この生業(なりわい)をアタシに教えて下すったトロトゥラ先生の魂にかけて，三度屁をこいても必ずや四度目のは，先生の父上，母上の魂が，罪の赦しを受けられるようにと祈って，こかせて頂きます。

〔第6段〕 この草々を決して食されぬことですな。何故なら，この国に居るどんな強い牛でも，どんなに丈夫な軍馬でさえ，舌先にホンの豌豆ま

め程の量を食べただけでも頓死を遂げぬものが無い位，それ程，この草は強く苦いのですな。口に苦いものは心には良きものとも申しますな。草々を上等の白葡萄酒に三日間寝かせて置いて頂きましょう。もし白がなければ赤にして下され。赤葡萄酒もなければ，きれいな清水をな。酒蔵に一樽持たぬ者は，門前に井戸を持っているものですからな。それから，十三ケ日の間，朝の目覚めに飲みなさるがよい。もし一日失策ったら次の朝になされよ。

これは魔法などではありませんから。

よく言って置くが，それと引き替えに神様が売られし三十枚の銀貨をイエルサレムから三里離れたアビランの塔内で鋳造しをったユダヤ人コルビタツ，こ奴を神様が呪われしあの御受難にかけて，皆の衆よ，四方八方の病，あれやこれやの痛み，四日熱を除いた全ての熱病，中風以外の全ゆる瘻，腫物に，もし痛むのでしたらケツの血管も直ってしまうわいな。何となれば，もしアタシの母なり父なりが今にも死にかかったとして，アタシが与えられる一番効く草を所望したとするならば，この草を投与するところですからなあ。

〔第7段〕 まあこんな具合に，アタシは薬草と膏薬を売りますのさ。御入用の方はさあお持ちなさい。さもなきや，取った手から放したり，放したり！

以上は E. Faral & J. Bastin, Œuvres complètes de Rutebeuf, 1959—1960, 2 vols., Paris, Picard.（以下F. B. と略称）のうち，tome 2. pp. 272—280 の Le Dit de l'Herberie を和訳したものである。訳出にあたり他の版本，研究論文等のうち主に参考にしたものを以下に記し，訳注の中で用いる略語を示す。

JUB.: A. Jubinal, Œuvres complètes de Rutebeuf, 1874, 3 vols.,

Paris, Delahays.

HAM.: E. B. Ham, The Rutebeuf Guide for mediaeval salescraft. *in* Studies in Philology, vol. 47, 1950, pp. 20—34.

REG.: N. F. Regalado, The poetic patterns in Rutebeuf, 1970, Yale Univ. Press.

PAU.: A. Pauphilet, Jeux et Sapience au Moyen âge., Pléiade.

T. L.: Tobler-Lommatzsch, Altfranzösisches Wörterbuch (A-T).

E. B.: Etienne Boileau, le livre des métiers, éd. par G.-B. Depping 1837, Paris., Crapelet.

P. M.: P. Meyer, Manuscrits médicaux en français, *in* Romania, t. 44, 1915—1917, pp. 161—214)

訳注

タイトル：薬草売り *erberie* (herberie)　ここでは「薬種商」の意。第58行では総称的に「商品としての薬草」を指している。内容は確かに薬草売りらしさを随所に見せている（第20—25行, 50, 58, 62—64, 散文第三, 第六段落）ものの，他方で自分が「医者である」（第10行）と言ったり，「貧乏な薬草売りではない」（散文第一段）と述べたりもする。のみならず「王侯の侍医を務めた」（第10—15行）り，草ならぬ「宝石の収集に励んだ」（第26—38行，48—49）り，「歯」（第73—97行），「結石」（第101—103行），「肝臓病やヘルニヤ」（散文第6段）etc.「聾」ですら治療の対象にすると見える。何しろ高名な女医の弟子の一人であって「虫の病の病理学」からその治療法も修得した一カドの医者であるらしいのだ。

一体『語り手』は「薬草売り」なのか，それとも「医者」であるのか？

herbier＝薬種商であることは T. L.: Kräuthändler, Cotgrave (Dictionarie of the French and English Tongues): Herball; also an Herballist 等の訳語を待つまでもなく明らかな事と考えてよいだろう。但一つ十三世紀のパリ市長による職業目録である E. B. によると一種の帽子屋を指すことがあったと知れる。薬種商は他に *apotecaire* (apothicaire), *especier* (épicier) の各語によっても表わされる。前者は現代語と大差ない意味を持つが，後者は今では「食料品屋」でしかない。例えば十四世紀始めの「La Passion du Palatinus」

に登場する *Li Espiciers* は薬種商である。リュトブフのこの作品中で（散文第1段）胡椒やクミンを売る商人が如何にも零細な商いを営んでいるかのように言われているが，料理用スパイスとしてはこの二つに加えて肉桂があった程度なのであるから軽蔑するには当らない。

蛇足ついでに，現代語 pharmacie は Bloch-Wartburg の Dictionnaire étymologique によれば1314年初出とされていて，これは，フィリップ美王とルイ強情王の侍医であった Henri de Mondeville の著作 *La Chirurgie* 中に出ているのだが，ここでは「下剤をかけること」を意味しているようだ。

一方，「医者」を表わすのは通常 *mire*（他に代表的な異形としては *mie*, *mege* など）である。リュトブフを模倣したとも想像される，散文のみで記された *l'Erberie* (BN. fr. 1915 2, FB. t. 2, pp. 268—269, JUB. t. 3, pp. 158—162)）では自分を *mire fuisitien* の一人だと名乗っているように，*fisitien*（*farissien* などの異形がある）もよく用いられる（リュトブフでは *La Mort Rutebeuf* 第47行，*Le Testament de l'âne* 第50行など）。その他には *chirurgien.* も用いられた。

さて F. B. (t. 2, p. 266) によれば，もぐりで医療を施す者に対し何らかの処置をとる必要をパリ大学医学部が認め，1271年頃，特にapothicairesとherbiersに対し医師の処方に基く調薬のみにその業務を限定すべしと文書に明記している。また JUB. (t. 2, p. 58 n° 2) も1281年の学則に同様の趣旨の記事があると言う。これらはとりも直さず，そのような禁止に背く herbiers が多数存在した事を物語っている。リュトブフの「語り手」が薬草売り herbier であると同時に医者 mire であっても何ら矛盾はないことになる。この点で，F. B. (t. 2, p. 267) はリュトブフに類似した作品として，前述の散文のみの *l'Erberie* の他に *Goute en l'aine* (JUB. t. 3, pp. 192—194) を掲げながら，後者は「医者」の口上であって「薬草売り」のそれではないと断じているのは一見厳密に見えて実は正しくないように思われる。また REG. の指摘通り，La Passion du Palatinus 中の *Li Espiciers* のセリフ (PAU, pp. 274—5) は全く herbier のそれであって，類似作品として追加すべきであろう。

ともかく医薬兼業の herbiers また apothicaires または épiciers は，ある者は盛大に店を張り，他の者は細々と露天の商いを行っていた。リュトブフの『語り手』は，経歴は別にしても現状は後者に属する。街頭の薬売りがしばしば出鱈目な商売文句を並べていたことは，*mensonge d'erbeyr* (FB. t. 2, p. 266) と言われていた事からその程度が推し量られる。第8—9行，57には露天の雰囲気が，また第5—7行には事更らしく「嘘をつきません」と言っている所が可笑しいのである。

我が国語にはくすしがあって，医薬のその昔の関係を上手く表現しているから，タイトルにも，と考えたが，それでは訳し過ぎになるだろうか。

（以下，最初の数字は韻文部訳の行数を示す。）

10—15　カイロの大公殿下：聖王ルイは彼としては最初の十字軍遠征の途中，1249年6月，エジプトで捕虜になったが，一ケ月後に他の高官と共に，身代金を出して釈放され聖地に向っている。一方多くの将兵は仲々解放されずに辛い思いを味わった訳である。ルイ王に対して，腹に一物持っていたリュトブフは第12—15行に皮肉を込めたつもりかもしれない。

17　モレア国：1207年十字軍士がギリシャはペロポネソス半島に建てた王国。

19　サレルノ：当時ヨーロッパ随一の医学の中心地。以下ビュリエンヌを除けばすべてイタリアの地名。殊にアプリアは，散文部第一段にも出てくるがリュトブフにとっては気になる土地である（*La Chanson de Pouille*, *Le Dit de Pouille*）。このアプリアを含め *Biterne* の形で記されたヴィテルボそしてビュリエンヌ（他の写本〔BN fr., 24.432, D写本と以後略称〕では *Luserne*）はいずれも武勲詩でよく知られた地名でもある。リュトブフと武勲詩の影響については別に稿を起して論ぜねばなるまい。

29　ジャン司祭：名高いプレスター・ジョン。アジアまたはアフリカの異教徒の国々の真只中にキリスト教国を建てて君臨したとされている伝説的君主（PAU, p. 204, n. 2）。12世紀にアビシニア地方を折伏したネストリウス派の伝道僧が原形だという説もある（JUB, t. 2, p. 53, n. 3）

32—33，39—40　蘇生させる石：宝石の持つ超自然的な効能あるいは魔力への信仰の起源は古い。

34—38　鉄珍王，金光石，精金石，仁王血石これに加えて第49行の撥情滑石はそれぞれ順に *ferrite*, *cresperite*, *tellagons*, *galoface*, *garcelars* と原文にあり，HAM は懸命な説明を行い，それを嘲笑する FB も多少は解読を試みている。一方 T.L. は，どれもこれも heilkräftiger (Edel) stein「薬効ある（宝）石」とだけ言って涼しい顔である。これらは架空の宝石であって，これ以外の実在の宝石と組み合わせた作者は，「本当らしさ」と「嘘っ八（ぱち）」の混在から生まれるコミックな効果を狙っていると考えるべきであろう。HAM, F.B. は徒労であったし，T.L. のように断定するのは誤りに近いと思われるのだが。

42—46：原文ではこの部分最初の行に *lievres*（兎），最終行に *coars*（憶病な）がある。狐物語の coars 兎を連想させる（リュトブフのファブリオ *Charlot le Juif et la peau de lièvre* 第27行にも登場）が，この部分が論旨展開に何らかの寄与をしているとは思えない。

49　撥情滑石：前注34—38を参照のこと。

54　リンコリンドの国：これはどの国を指すのか？　HAM の Ceylon 説は F. B. p. 274その他で退けられたが，J. Baron (Rutebeuf et la Terre Lincorinde, *in* Romania 1973, n° 2—3, pp. 317—328) が武勲詩のヒロインの名であることを明らかにしている。*Simon de Pouille* (éd. J. Baron, 1968, Droz, T. L. F. 149) には *Licorinde* または *Licoride* の形だが，この二つの作品にのみ登場する固有名詞であることと，アビランの塔（後出注散文第6段三十枚の銀貨参照）も共有していることからリュトブフへの *Simon de Pouille* からの影響を推測している。

52　世界四方：要するに世界中，全世界という意味だが，リュトブフの『語り手』が世界を四角だと考えていたとしても不思議ではない。（散文第1段，第3段にも同じ表現がある。）

62—64：リュトブフの多数の作品中に満ちている聖母マリアへの敬愛心を知る者にとって，第59行でマリアを口にした直後にこのような下品さへの転回を見せたことはショッキングかも知れない。HAM. もそうした一人だったのかどうか。この部分を含め，第84—85行，96—97及び散文第5段で26語を故意に訳し落している。しかし，露骨な表現，下品さ愛好心を覆い隠すのは，リュトブフに限らずそれが中世人の特色の一つであるだけに，正当なことではないと思える。

65　四日熱：難病の一つ，四日毎に熱がぶり返す。三日熱と言ってやや軽い症状もあった。P. M. には四日熱の処方例もある。(p. 173, p. 183)

68　腫物：原文の *goute flautre* は実の所意味不詳。*goute* は非常に意味範囲が広く，*flautre* は他に例を見ない語だが，F. B. (t. 2, p. 275, n. 2) は fistule 瘻管と断定している。

71　おケツの血管：痔を指すと思われるが。散文部第6段にも出てくる。

73　歯痛：13世紀当時パリに歯科医は唯一人しか居なかった。(E. B. introduction, p. lxxix)

80—92：この出鱈目極まる製薬法はしかし，当時の正統的な薬学教科書を少々誇張しているだけであって，同時代人にとってすら物笑いの種になっていたらしい(F. B. t. 2, p. 275, note)。ちなみに一つ「眼の充血をとる」処方を紹介して置く。「眼の充血と痒みを取るには，不純酸化亜鉛及び菱亜鉛鉱を一緒に熱し，真赤に熱したら，白葡萄酒で二度ないし三度冷すべし。然る後これを粉末にした上に竜血を加えて混ぜ合わせよ。更に，豚の脂，去勢鶏の脂，鵞鳥の脂そして雄鹿の脂肪と一緒に練り合わせ，朝，赤葡萄酒で作ったローズ水で洗うべし。」(P. M., p. 173)

散文第1段例の貧乏な説教坊主：リュトブフが攻撃して止まない，ドミニコ会修道士を特に指すと思われる。

サレルノのトロトゥラ：Trotula. サレルノ学派の女医（但し，REG. p. 253, n. 85 によれば男だと言う）。11世紀の人で特に婦人病に関する二冊の医学書で中世を通じて高名であった。13世紀にはフランス語訳が出た。(P. M., p. 206以下)。D 写本には *Trote* ならぬ *Crote*（ウンチ）とあって一層ふざけている。

散文第2段虫の病：後出の熱と体液による虫の生成理論は，熱と冷，乾と湿の組合せによる発生の原理の応用であるらしいが，F. B. (t. 2, p. 277, n. 4) も一応，単に喜劇的効果を狙ったものとしながら，他方，虫発生理論と虫の病がポックリ死に及ぶと述べる，13世紀の作者不詳の説教を紹介している。

ポックリ：*mort subitaine.* は文字通り「突然の死」であり，キリスト教徒にとっては終油の秘蹟も悔恨の暇も与えられぬ為に天国行きを許されぬ恐ろしい死に方であった。本来病名ではない。

散文第3段にがよもぎ：*ermoize* (armoise) の実際上の効能については諸説紛紛だが「草々の母」という呼び名は，その通りに用いている文献は多数ある (F. B. t. 273, note)「マールボール」*marre borc* はラテン語 mater herbarum のフランス語化された形。

サン・ジャンの日：6月24日，夏至祭の日。

アタシ奴が生国シャンパーニュ：リュトブフの第一作といわれる *Le dit des Cordeliers*「コルドリエ僧団の話」は1249年当時リュトブフがシャンパーニュのトロワに居て取材したことを推測させる。その他にもシャンパーニュ伯チボー五世の追悼詩を作ったり，家臣のエラール・ドゥ・レジヌの求めに応じてチボー伯夫人の為に「聖女エリザベート伝」を物したり，その他にもリュトブフとシャンパーニュを結ぶ糸は少くない。これらに強い証拠能力がある訳ではないが，パリを除けば他のどの場所よりも関係が深いという事ぐらいは言える。リュトブフが『語り手』の口を借りて，自分を語ったのかもしれない。

散文第4段1ドゥニエ：銀一ポンド (livre) の$\frac{1}{240}$。また$\frac{1}{12}$スー・13世紀まで実際に通用していたほとんど唯一の貨幣でパリで鍛造されていたパリジ，トゥールで出たトゥルノワの二種。4ドゥニエ・パリジ＝5トゥルノワの換算。1266年エキュ金貨，グロ銀貨（＝1スー）が発行される (R. Fédou, Lexique historique du moyen âge, 1980, A. Colin.) が普段にお目にかかる代物ではなかった。1ドゥニエはパン一個程度の値うち。

仕分け：1ドゥニエ分の量の品をつくること。

散文第4段而して祭壇……：諺。PAU. (p. 208, n. 2) は，「同じ職業に仕

える者（ここでは物売りとその駄馬）は，同じように生活しなければならぬ」と解くが，「神に仕える者はお布施によって生きねばならぬ」のだから，『語り手』が自分の弁舌に対する報酬を要求しているとは，解せないだろうか。

散文部第6段頓死：*male mort* は P. M. (pp. 171—172, la cyrurgie mestre Rogier de Salerne) によれば「黒胆汁 mélancolie によって起る病気で，脚，脇腹，腕に生じる大きな固い腫れ物であるが，痒みのないのが特徴」らしい。牛，馬が mélancolie に由来する病気に羅る，という所で笑わせるのだろうか。

白がなければ……：E. B. によれば庶民はほとんど一種類のブドー酒すなわち vin vermeil しか味を知らなかった（introduction, p. lix.）らしい。白ブドー酒は P. Meyer の紹介する処方箋に頻出するように薬用に用いる貴重品であったようだ。

魔法：魔法ならば，手続きを唯の一つも違えることは許されない。そうではないので，一日ぐらい飲み忘れても構わない，と言っている。

三十枚の銀貨……：イエスを裏切った報酬にユダが受け取った三十枚の銀貨の由来を説く伝承。(E. B,, t. 2, p. 279, note. には詳しい参考文献目録がある)。コルビタツは武勲詩中でイエルサレム王としてしばしば登場する名前。アビランも武勲詩中の地名だが特に *Simon de Pouille* では主な舞台となっており，「三十枚の銀貨」の伝説とは元々関係が無いのに，その名前やリンコリンドだけがリュトブフの耳に強く印象づけられていたと考えられる。

訳注の中には言わずもがなの冗長散慢有り。また逆に説明の足りないのもあり，訳文と共に誠に不出来だが乞堪忍。

結語：*Li Diz de l'Erberie* は F. B. がしているように喜劇的作品群の一つとして位置づけることが出来るが，リュトブフ作品の枠を外せば，E. Picot のように「独白劇」というジャンルに (monologues dramatiques, *in* Romania, XV, p. 358, XVI, pp. 438—542)，更に絞れば「物売りの口上のパロディー」の一つと言えよう。物売りを「薬草売り」に限定した場合，類似作品として〔訳注，タイトル〕で掲げた二つの作品と *La Passion du Palatinus* 中の *Li Espiciers* のセリフがあるが，これらと比較してリュトブフのものは最も長く，最も生彩に富んでいる。やや長い，散文のみからなる *l'Erberie* にしても，「経歴紹介」，「妙薬の調合法」，「土地の通貨による支払い」，「四度目の屁」，「三十枚の銀貨のエピソード」などリュト

ブフ作品と共通部分が多い。またその後半にある「ナンセンス問答」はREG (pp. 251—252) の指摘する通り，他のファブリオと一致している等，明らかな模倣作品である。とは言え，全体としては結構コミックな効果を上げる事に成功している。

さて冒頭に話が戻るが，韻文と散文を組み合わせて一つの作品とした不自然さは依然として覆えないままである。確かにC写本 (BN. fr. 1635) では紛れもなくリュトブフ作品集の中途に収まっているし，82篇のディとファブリオの中にリュトブフの5篇をバラバラに収めているD写本 (BN. fr. 24, 432) にしてもL'Herberieの直後に続けてリュトブフの *la Disputaison de Charlot et de Barbier* が入り，両写本とも韻文プラス散文の形で入っていることを見れば，両部が一体としてリュトブフの作品であることを疑う外的根拠は何もない。また両部の接合個所の韻文第113—114行が次の散文部第1段を予告していることも確かである。

ところで，韻文部と散文部に重複する個所がいくつかある。「四日熱 etc.」，「痔」それに「腫物」の記述である。それよりも，両部で，同じく薬種採集旅行歴を述べながら，各々で場所の一致不一致があり，また同様の趣向で薬の調合法を長々と説くなど，当初から全体を二部構成にする予定であったとは考えにくい点がある。むしろ両部はそれぞれ独立した一個の作品と見ても可笑しくないのだ。F.B. は韻文に続けて，より容易に効果的な物売りの模倣ができて，かつ冗談，ふざけの言い易い散文に転じた旨 (t. 2, p. 267) の説明をしているが果してそうだろうか。先ずは制作のし易い散文で書いたリュトブフが，次いで押韻家としての本分に立ち戻り韻文部を完成させた。両部を見比べた作者は，散文を捨て去るに忍びず，2行の接合個所を追加して韻文に散文をつないだ。とこのように筆者には思われるのだ。未だ証拠は整わず，これだけでそうと断定するには根拠薄弱だが，このように制作過程を想像するほうが納得が行くのである。

韻文部にリュトブフが選んだのは，詩節分け無しで，8音綴2行プラス

（次の8音綴行と押韻する）4音綴1行，図式化すれば $aa^bbb^ccc^ddd^eee$……etc. という詩形であって，リュトブフ作品中9篇に採用されているが，内5篇はリュトブフの身辺を語る，いわゆる poésie personnelle に属する。これらの中で，賽ころ賭博に身を持ち崩し，理不尽で楽しみのない結婚に，また友の離反に泣く詩人を演じて見せたリュトブフが，*L'Herberie* では「自分」の代りに「薬草売り」を演じて見せたのだ。逆に言えば，先の5篇も「薬草売りの口上」と同様に，独白劇——一人芝居と見えないこともない。多くの顔を持つリュトブフは，表情が豊か過ぎて，なかなか素顔を見せてくれない。「変幻自在な役者」(J. Dufournet, Rutebeuf, Poèmes de l'infortune et poèmes de la croisade., 1979, Champion, p. 15) が本領であるリュトブフだが，「薬草売り」という「他者」を演じる時，計らずも「自分」を見せることがあるかもしれない。「シャンパーニュ生れ」はそれ故に真実かもしれないし，そうでないかもしれない。「他者」とは言え，「物売り」と「ジョングルール」は祭りや市での朋輩であり隣人である。「教会前に出向いて，綻びだらけのボロマントを着た貧乏な薬草売りでもない」と言う作者の心中には自虐の悲しみが漂っている。

テクスト：CI COUMENCE LI DIZ DE L'ERBERIE.

Seigneur qui ci este venu,
Petit et grant, jone et chenu,
Il vos est trop bien avenu,
4 Sachiez de voir.
Je ne vos vuel pas desovoir:
Bien le porreiz aparsouvoir
7 Ainz que m'en voize.
Aseeiz vos, ne faites noise, fol. 80 v⁰
Si escouteiz, s'il ne vos poize:

10 Je sui uns mires,
Si ai estei en mainz empires.
Dou Caire m'a tenu li sires
13 Plus d'un estei;
Lonc tanz ai avec li estei,
Grant avoir i ai conquestei.
16 Meir ai passee,
Si m'en reving par la Moree,
Ou j'ai fait mout grant demoree,
19 Et par Salerne,
Par Burienne et par Byterne.
En Puille, en Calabre, en Palerne
22 Ai herbes prises
Qui de granz vertuz sunt emprises:
Sus quel que mal qu'el soient mises,
25 Li maux s'en fuit.
Juqu'a la riviere qui bruit
Dou flun des pierres jor et muit
28 Fui pierres querre.
Prestres Jehans i a fait guerre;
Je n'ozai entreir en la terre:
31 Je fui au port.
Mout riches pierres en aport
Qui font resusciteir le mort:
34 Ce sunt ferrites,
Et dyamans et cresperites,
Rubiz, jagonces, marguarites,

37 Grenaz, stopaces,
Et tellagons et galofaces.
De mort ne doutera menaces
40 Cil qui les porte.
Foux est se il se desconforte:
N'a garde que lievres l'en porte
43 S'il se tient bien;
Si n'a garde d'aba de chien
Ne de reching d'azne anciien
46 S'il n'est coars;
Il n'a garde de toutes pars.
Carbonculus et garcelars,
49 Qui sunt tuit ynde,
Herbes aport des dezers d'Ynde
Et de la Terre Lincorinde,
52 Qui siet seur l'onde
Elz quatre parties dou monde
Si com il tient a la raonde,
55 Or m'en creeiz.
Vos ne saveiz cui vos veeiz;
Taiziez vos et si vos seeiz:
58 Veiz m'erberie.
Je vos di par sainte Marie
Que ce n'est mie freperie
61 Mais granz noblesce.
J'ai l'erbe qui les veiz redresce
Et cele qui les cons estresce

64 A pou de painne.
De toute fievre sanz quartainne
Gariz en mainz d'une semainne,
67 Ce n'est pas faute;
Et si gariz de goute flautre,
Ja tant n'en iert basse ne haute,
70 Toute l'abat.
Se la vainne dou cul vos bat,
Je vos en garrai sanz debat,
73 Et de la dent
Gariz je trop apertement
Par un petitet d'oignement
76 Que vos dirai:
Oeiz coument jou confirai;
Dou confire ne mentirai, fol. 81 r⁰
79 C'est sens riote.
Preneiz dou sayn de marmote,
De la merde de la linote
82 Au mardi main,
Et de la fuelle dou plantain,
Et de l'estront de la putain
85 Qui soit bien ville,
Et de la pourre de l'estrille,
Et dou ruyl de la faucille,
88 Et de la lainne
Et de l'escorce de l'avainne
Pilei premier jor de semainne,

91 Si en fereiz
Un amplastre. Dou jus laveiz
La dent; l'amplastre metereiz
94 Desus la joe;
Dormeiz un pou, je le vos loe:
S'au leveir n'i a merde ou boe,
97 Diex vos destruie!
Escouteiz, s'il ne vos anuie:
Ce n'est pas jornee de truie
100 Cui poeiz faire.
Et vos cui la pierre fait braire,
Je vos en garrai sanz contraire
103 Se g'i met cure.
De foie eschauffei, de routure
Gariz je tout a desmesure
106 A quel que tort.
Et se vos saveiz home xort,
Faites le venir a ma cort;
109 Ja iert touz sainz:
Onques mais nul jor n'oy mains,
Se Diex me gari ces deus mains,
112 Qu'il orra ja.
Or oeiz ce que m'encharja
Ma dame qui m'envoia ça.

Bele gent, je ne sui pas de ces povres prescheurs, ne de ces povres herbiers qui vont par devant ces mostiers a ces povres chapes mau-

cozues, qui portent boites et sachez, et si estendent un tapiz: car teiz vent poivre et coumin qui n'a pas autant de sachez com il ont. Sachiez que de ceulz ne sui je pas, ainz suis a une dame qui a non ma dame Trote de Salerne, qui fait cuevrechiés de ses oreilles, et li sorciz li pendent a chaainnes d'argent par desus les espaules. Et sachiez que c'est la plus sage dame qui soit enz quatre parties dou monde. Ma dame si nos envoie en diverses terres et en divers païs: en Puille, en Calabre, en Tosquanne, en terre de Labour, en Alemaingne, en Gascoingne, en Espaigne, en Brie, en Champaingne, en Borgoigne, en la forest d'Ardanne, por ocirre les bestes sauvages et por traire les oignemenz, por doneir medecines a ceux qui ont les maladies es cors. Ma dame si me dist et me commande que en queil que leu que je venisse, que je deïsse aucune choze, si que cil qui fussent entour moi i preïssent boen essample. Et por ce que le me fist jureir seur sainz quant je me departi de li, je vos apanrai a garir dou mal des vers, se vos le voleiz oïr. Voleiz oïr ?

Aucune genz i a qui me demandent dont les vers viennent. Je vos fais a savoir qu'il viennent de diverses viandes reschauffees et de ces vins enfuteiz et boteiz, si se congrient es cors [fol. 81 v°] par chaleur et par humeur: car, si con dient li philosophe, toutes chozes en sunt criees Et por ce si viennent li ver es cors, qui montent juqu'au cuer et font morir d'une maladie c'on apele mort sobitainne Seigniez vos: Diex vos en gart touz et toutes !

Por la maladie des vers garir — a voz iex la veeiz, a vos piez la marchiez — la meilleur herbe qui soit elz quatre parties dou monde ce est l'ermoize. Ces fames c'en ceignent le soir de la saint Jehan et en font chapiaux seur lor chiez, et dient que goute ne avertinz ne les

puet panre n'en chief, n'en braz, n'en pié, n'en main. Mais je me merveil quant les testes ne lor brisent et que li cors ne rompent par mi, tant a l'erbe de vertu en soi. En cele Champeigne, ou je fui neiz, l'apele hon marreborc, qui vaut autant com 《la meire des herbes》. De cele herbe panrroiz troiz racines, .V. fuelles de sauge, .IX. fueles de plantaing. Bateiz ces chozes en .I. mortier de cuyvre a un peteil de fer. Desgeuneiz vos dou jus par. III. matins. Gariz sereiz de la maladie des vers.

Osteiz vos chaperons, tendeiz les oreilles, regardeiz mes herbes, que ma dame envoie en cest païs; et por ce qu'ele vuet que li povres i puist ausi bien avenir coume li riches, ele me dist que j'en feïsse danrree: car teiz a .I. denier en sa borce qui n'i a pas .V. sols; et me dist et me conmanda que je preisse un denier de la monoie qui corroit el païs et en la contree ou je vanroie: a Paris un parisi, a Orliens un orlenois, au Mans un mansois, a Chartres un chartain, a Londres en Aingleterre un esterlin, por dou pain, por dou vin a moi, por dou fain, por de l'avainne a mon roncin: car ceil qui auteil sert d'auteil doit vivre.

Et je di que s il estoit si povres, ou hom ou fame, qu'il n'eüst que doner, venist avant: je li presteroie l'une de mes mains por Dieu et l'autre por sa Meire, ne mais que d'ui en un an feist chanteir une messe de Saint Esperit, je di noumeement por l'arme de ma dame qui cest mestier m'aprist, que je ne fasse ja trois pez, que li quars ne soit por l'arme de son pere et de sa mere en remission de leur pechiez!

Ces herbes vos ne les mangereiz pas: car il n'a si fort buef en cest païs, ne si fort destrier, que, s'il en avoit ausi groz com un pois sor la langue, qu'il ne morust de male mort, tant sont fors et ameires; et ce

qui est ameir a la bouche si est boen au cuer. Vos les me metreiz .Ⅲ. jors dormir en boen vin blanc. Se vos n'aveiz blanc, si preneiz vermeil; se vos n'aveiz vermeil, preneiz de la bele yaue clere: car teiz a un puis devant son huix qui n'a pas .I. tonel de vin en son celier. Si vos en desgeunereiz par .XⅢ. matins. Se vos failleiz a un, preneiz autre: car ce ne sont pas charaies. Et je vos di par la paission dont Diex maudist Corbitaz le juif [fol. 82] qui forja les .XXX. pieces d'argent en la tour d'Abilent, a .Ⅲ. liues de Jherusalem, dont Diex fu venduz, que vos sereiz gariz de diverses maladies et de divers mahainz, de toutes fievres sanz quartainne, de toutes goutes sanz palazine, de l'enfleüre dou cors, de la vainne dou cul s'ele vos debat. Car, se mes peres et ma mere estoient ou peril de la mort et il me demandoient la meilleur herbe que je lor peüsse doneir, je lor donroie ceste.

En teil meniere venz je mes herbes et mes oignemens. Qui vodra, si en preingne; qui ne vodra, si les laist !